

2019/08/25

「インマヌエル」

「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)」(マタイ 1:23)

イエス・キリストは、ご自分をぶどうの木にたとえ、私たち一人一人はその枝であると言われました。神という根っこに、誰もがつながっているということです。しかし、アダムとエバによって人類に死が入り、神とのつながりが壊れてしまったために、生まれながらの人間は、ぶどうの木の枝が折れ、やがて枯れてしまう存在になってしまいました。また、神と私たちの関係は、体と器官の関係にもたとえられます。体と器官をつなぐ血管が壊れてしまった状態の私たちに対して、神は「私の手を握りなさい」と呼びかけ、その声に応えて神の御手を握るなら、血管が再び回復して、私たちは生きるものになります。ただし、一度枯れることになった体が朽ちることは避けられず、その後新しいいのちが芽吹くようになっているというわけです。

いずれにしても、血が通っているかいないかの違いがありますが、私たちはキリストのからだにつながっていて、私たちの土台は神です。神を信じようが信じまいが誰もが神の声を聞いているのです。

■人の判断基準

私たちが何かを考える時、心の中には必ず基準となるものがあります。たとえば、「男らしい」とか「男らしくない」などの言葉を使う時、それは「男とはこうあるべきだ」という基準があり、その枠組みから外れているものに対して「男らしくない」、つまり「本物らしくない」と判断しているのです。それは、裏を返せば本物を知っているということになります。あるいは、みんなが「あいつは悪い奴だ」という時、それは私たちの中に「正義」という基準があることを表しています。

なぜ私たち一人一人の中にそのような規定があるのでしょうか。それは、すべての人の内に神がおられるからとしか言いようがありません。私たちの中に、私たちの力が及ばない何かが書き込まれているのです。それは神が私たちと共におられるからです。

「彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいつしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。——」(ローマ 2:15)

私たちの心に神の律法が書き込まれていることによって、実は、私たちは絶えず葛藤を覚えることになりました。つまり、心は正しいものや本物を知っているのに、現実に見える世界にはそれがないという葛藤です。そこで人間は、本物に近いものも、だいたい本物と同じ

ものとして理解しています。しかし、実際のところは違うので、頭ではそう認識していても、魂は常に違和感を覚えているのです。それは、人にはどうすることもできないものです。

人間は、魂（心）と体から成り立っています。そして、その魂は神のいのちによって造られたと聖書は教えています。ですから、人の魂には神の思いが書き込まれているのです。そのために私たちの中には絶対的な情報があり、それが物事を判断する基準となっています。そして、人は五官を通してこの地上のさまざまな情報を手に入れます。そして、入手された情報と、絶対的な情報とをすり合わせるところが精神です。精神がすり合わせを行う時に、意識となります。

ところが、五官を通して入ってくる情報と、魂に書き込まれている情報とでは、かなりの違いがあります。というのは、魂に書き込まれている情報は永遠のものですが、この世から仕入れる情報には死があります。どちらが正しいのかと言えば、神が造った魂に書き込まれた情報が正しく、私たちの魂はこの世界でもそれを見ているわけですが、死に支配されたこの世では五官がどうやっても見ることができないというジレンマに陥るのです。その結果、私たちはそれらしきものを見てはいるが、本物を見ているわけではないという不安を覚えるのです。

これらのことでもう一度整理してみましょう。私たちの中に書き込まれた神の律法によって、私たちの中にはこうあるべきだという規定が存在しています。しかし、現実の世界で人はそれを実行することができません。すると人は、規定に反しているからということで、「なぜできないのだ」「らしくない」と言って裁くのです。自分の中にある規定に対してどうすることもできない私たちは、常に不安と葛藤にさらされています。これが私たちを苦しめる原因になってしまいます。

このことがわからないと、神が共におられるという意味があいまいなものになってしまいます。たとえやイメージではなく、本当に私たちの中に神がおられ、私たちを支えておられるのです。それは、魂としておられるということです。魂が持つ神の情報と、五官を通して仕入れたこの世の情報を、精神によってすりあわせ、私たちはそれを意識するわけですが、意識というものが存在するのは、最初に絶対的な神がおられるからなのです。

■人の本当の姿

私たちは神に似せて造られた者であり、私たちを支えているのは神のいのちであって、私たちの本当の姿は神ご自身の姿と同じものだと、魂は私たちに訴えます。神と同じ姿とは、死ぬことがなく永遠で、良きものであるということです。しかし、私たちが見る現実は、そうではありません。肉体が仕入れてくる情報は、私たちはやがて死ぬものであり、ダメなものだという情報です。この矛盾に、人は苦しんでいます。

もちろん神が教えていること、魂が訴えている内容が真実です。私たちの肉体は今見ている世界はおぼろげなものを事実だと認識していますが、神の基準とはだいぶ違うので、現実の自分や自分を取りまく状況を神の基準と照らし合わせてダメなものだと判断し、私たちはつらさを感じています。

「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」

(I コリント 13:12)

私たちは、私たちの中に絶対的なもの、すなわち、神のいのちがあつてそれを物差しにして生きています。そして、人はそれに近い姿になろうとするのですが、ぼんやりしたものにしかならず、自分はダメだと思ってしまうのです。しかし、その時が来るとぼんやりしていたものが、はっきりと見えるようになります。その時とは、肉体が滅びる時、すなわち死のことです。肉体が滅びる時、キリストを信じる者は靈のからだに変えられます。

靈のからだに変えられると同時に死がない世界に入り、絶対的な物差しと一致する情報しか入ってこなくなります。私たちの中にもともとあったのは、死がないいのちです。今の世界には死があるため、混乱が生じましたが、靈のからだに変えられると神と同じ情報しか入ってこなくなるので、自分の姿は本当に神に似せて造られたのだとはっきりと知ることになります。今私たちが見ている姿は一部であり、本当の自分の姿を見てはいません。つまり私たちは自分の姿を見てダメだとか言っていますが、それは全部偽物の姿に惑わされているだけで、本当の姿は神の似姿であり、それに気づく時が来ます。

私たちが犯す罪は、肉体が滅びる時、この世と共に全部消えてなくなってしまいます。残るのは、魂という土台だけです。そして、靈の体を頂くと、その時あなたは神に似せて造られた良きものだ、これが真実な姿なのだということがはっきりわかるようになります。

「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」 (I コリント 13:13)

愛とは神を指します。信仰と希望と愛、つまり神と神に対する信頼だけが残ります。ぼんやりと映っていたもの、私たちが間違つてしまつたことは何も残らず、ただ神を愛する心だけが残ります。ですから私たちは神を愛する心をこの世界で増し加えて生きましょう。神を愛する生き方こそが、真実な生き方になるのです。

あなたは神を信じるといながら、中途半端に生きてはいないでしょか。おぼろげな自分を見て、そのおぼろげな自分をどうやってよく見せるかを気にして生きてはいないでしょか。本当に神を信じるなら、土台は神なのでから、神を信頼するという生き方を徹底して信じなさいとイエス様は私たちに説いています。「神の国と神の義を第一に求めよ。」これがイエス様が私たちに教えていることです。何が残るのかにしっかりと目を留め、土台はイエス・キリストでありそれしか残らないということを、徹底的に心に留めて生きましょう。

人はうわべを見て、ぼんやり見えている姿が自分だと思っています。そのうわべを比較して価値を見出そうとしていますが、ぼんやりであってもそれが神に近いかどうかを基準に良

し悪しを決めているものです。しかし、ぼんやり見えているものは見せかけであって、本当の姿ではありません。一人一人の中に絶対的な姿があつて、それこそがその人自身なのです。魂はそれを訴え続けています。この世のものしか見ることができない私たちは、この魂の訴えすら、絶対的な価値とは違うからダメなのだと思い込んでしまっています。自分の中にある本当の価値に気づかないことが、人の本当の悲劇なのです。

■本当の悲劇

私たちはつらい出来事に出会うと、苦しみを取り除きたいがために、解決しようと立ち向かったり、逃げ出そうとしたりするものです。しかし、人にとって本当の悲劇は、つらい出来事に出会うことではありません。本当の自分の姿に気づいていないことです。

むしろつらい出来事は、本当の自分の価値に気づかせてくれるチャンスにもなり得ます。

ペテロは、イエス様を裏切るという罪を犯しました。自分の罪深さに苦しむペテロに対して、イエス様は優しいまなざしを向け、あなたの罪は赦されているから大丈夫だというメッセージを送ったのです。主を裏切るような悪い人間なのに愛されていると知ったこの時、ペテロは自分の輪郭がはっきりと見えるようになりました。自分は、神に愛される良きものだということがはっきりと見えるようになりました。

神は私たちに対して、「あなたは高価で尊い。私はあなたを愛している。」と言われます。これは決して口先だけの慰めではありません。神の目にはそうとしか見えないのです。この「私は神に愛されている」ということに気づくことができるのは、自分の罪に気づくときなのです。

ある時、姦淫の現場で捕まった女性がイエス様のもとに連れてこられました。人々は、こんな女は石打ちにして殺すべきだと叫びましたが、イエス様は「この中で罪を犯したことのない者が最初に石を投げよ。」と語られました。すると誰も石を投げることができなくなり、イエス様も彼女に対して「私もあなたを裁かない。」と言って、赦されたのです。この時初めて彼女は、自分はダメなものではなく愛される良きものだということに気づきました。それが自分の本当の姿だとはっきりと見えるようになりました。今まで自分が自分だと思っていた姿はぼんやりしたものであり、本当の姿ではなかったということです。

このように私たちが悲劇だと思っているつらい出来事は、実は本当の自分に気づかせるチャンスになり得るのです。

私たちが悲劇だと思う出来事は、患難や天変地異、病気などがありますが、これらの苦しみをすべて請け負った人物が旧約聖書に登場します。ヨブです。ヨブは神を敬い正しく生きてきましたが、持ち物を失い、家族を失い、自身もひどい病気にかかってしまいました。初めは神は良き方だと言っていたヨブでしたが、だんだん腹が立ってきて、ついに神と言い争うようになります。その時、彼は自分の傲慢さ、罪深さに気づき、へりくだつて神に赦しを求めました。すると神は裁きもせず、責めもせず、ヨブを祝福し、失ったものを倍にして与えました。

イエス様が語った放蕩息子の話もそうです。罪に気づいて赦しを乞うと、罰せられるどころか祝福され、多くのものを与えられます。自分はなんとダメな者かと苦しみ、心を神に向

けたその時、神が見ている姿と自分が見ている姿のギャップに気づき、これまで自分が見てきた姿はぼんやりとした見せかけであって、真実の姿ではないことに気づくのです。

神は、「私の目にはあなたは高価で尊い。」と、これが真実な姿だとずっと訴えておられます。神があなたの土台であり、神はご自分とあなたを一つのものとして、神の姿に造られたのです。それを知らないことが、本当の悲劇です。このことを知ると、人に対しても、「この人も神の似姿に造られた。神のいのちがここにある。神に愛されるものなのだ。」と思えるようになり、互いに争ったりしなくなって私たちの中に平和が訪れるのです。

私たちはブドウの枝であり、皆つながっていのちを共有しています。神が私たちの土台です。それが「インマヌエル」という意味なのです。神が共におられるということを深く考えてみましょう。私たちが何かを考え、判断することができるのは、神が共におられ、メッセージを送り続けていてくださるからです。ですから、その神に目を向け、神と一緒に生きましょう。その時、互いの間に平和を築くことができるようになります。